

到達目標の学生による評価から見た「発達と学習」の授業と課題

学校教育講座(教育心理学研究室)・橋本 巖

1. 授業の目的

発達と学習は、教職科目 A の必修科目群の中でも 1 回生後期という早い段階に登場する基礎的な科目である。「教育の基礎理論に関する科目」に該当し、内容的には、「幼児・児童・生徒の心身の発達及び学習の過程(含、障害のある者)」に関する基本的な事実や考え方を、主に教育心理学的講義を受けて学ぶ。特に本授業では、家庭・学校や大人の影響を意識しつつも、むしろ「子ども」という主体が人生の各時期(発達段階)に見せる生きる力(発達、学習)とその変化の仕組みを考えることを優先している。その上で、人生の一時期を共有する教師として、子どもの発達を支援する基本的着眼点を各自が見出すよう要請している。それを具体化したのが、表 1 にも示す、7 つの到達目標である。今期の受講登録者は、学校教育教員養成課程と特別支援教育教員養成課程をあわせて 138 名であった。

2. 今年度意識した取り組み

本授業では基本的な学問的内容を押さえることよりも、子どもの発達について学ぶ意義(なぜ必要か)について認識を養うため、子どもの発達現象のリアリティをビデオ等で示す一方、教育実践や学校教育制度の現状において発達の認識が現在とても重要となっていることを丁寧に解説している(授業内容については、ウェブシラバスを参照されたい)。これは、教員免許更新講習(必修講座)の「教育の最新事情」を筆者が担当し、特別支援教育などを含めて発達を解説する方向にシフトしているためでもある。同様に、平成 22 年度は、生徒指導提要在が発行され、また「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」が出されるなど、発達に関する大きな公的見解が公表された年度であった。これらは、生徒指導と発達障害、あるいは知的・学習的発達と社会的発達との関連づけ、など生涯発達の視点を示し、また心理学的支援スキルの現場への紹介など、非常に学術的にも興味深い提起を含んでいる。生徒指導提要在も幼児期と小学校教育の接続に関する答申もまずダウンロードを促し、生徒指導提要在については刊行後は購入を指示した。

学生への情報提供方法として、修学支援システムによる資料情報(添付ファイル)提供や、テレビ

の教育番組案内、シラバス図書の活用呼びかけなどを行った。また、例年どおり、教育実践場면을記録したテレビ番組(例: NHK スペシャル「子ども輝けのち 涙と笑いのハッピークラス: 4 年 1 組命の授業」)を頻繁に利用し、多数配布する資料読解の視点や具体化を与えるなどの工夫を行った。2 回ある大部なレポート課題の第 1 回では、「いのちを体で感じよう」という、高校生と幼児との異年齢交流実践を報告した番組ビデオを視聴させ、発達の視点の重要性を考えてもらっている。その視聴を保障するため、欠席者への再上映会なども行っている。その他、成績評価には毎回の出席カードにおける記述も重視(2~3 割として算入)すると明言している。資料も多く、書かされることも多い授業、ということになるのか。

3. 授業評価法

学生による自由記述を重視したアンケートを実施した。自由記述項目は、共通教育の授業評価アンケートと同様に、授業者の授業方法や姿勢を学生が評価する。教員の熱意・取り組み方、資料等の利用、受講者とのコミュニケーション、レポート課題の捉え方、授業への興味、などである。その他、本授業で得るところの大きかった内容や提示ビデオ、本授業の特徴、他の授業との類似性、授業外に本授業を想起した経験、などを聞き、学生の中でのカリキュラムマップ的な認知を知ろうとした。

一方、数年前から、本授業の 7 つにわたる到達目標の到達度についての 4 段階評定(表 1 欄外参照)も求めている。講義中心の大人数授業であるとはいえ、知識、思考、態度などの領域において、到達目標は必要な認知的スキルのリストでもある。それらを学生が習得したという自信を得ているか自己評価を求めるとともに、教員の意図や努力に対する評価として、「各到達目標は、授業や課題において意図的に取り上げられていた(または、到達できるような配慮を持って教員が指導していた)か」についても 4 段階評定を求めた。本講義では、主として、この到達目標の学生による評価結果に基づいて授業評価を行う。

授業評価アンケートの実施は、授業最終回までに予告し、修学支援システムでメール添付により配布し、最終授業終了後にメール添付での提出を

求めた。記名式とした。提出者は、87名(約63%)であった。協力意志の明確な受講者のみが回答したと思われることから、回答の質は高まるものの、偏りなく授業評価を行うには、実施方法として不十分であったと反省される。次学期より、方法を検討したい。

4. 授業評価結果とまとめ

A 到達目標に関する評定より

① 表1に、各到達目標についての自己評価及び教員への評価の平均値を示す。目標の(2)をのぞき、自己評価としては「3まあそう思う」を超えている。(2)は発達段階と発達課題という、本授業にとっては基礎的な事項であるため、学生がどのような点に不十分さを感じたのか、今後丁寧に検証したい。一方、教員への評価はすべて3点を超えており、表1右欄に示すように、目標(6)以外は、教員への評価が自己評価よりも有意に高くなっている。ただし、教員の指導意図や取り組みを高く評価する傾向は、自己の到達度評価と正の相関を示しており、自己への理解と教師への評価が連動している。目標(6)は発達や学習・教育に対する自己の先入観への気づきが、どの受講者にも非常に高く生じたことが示されたと考えられる。導入期の啓発的目的が果たされたと感じる。

②到達目標の(7)である「教職への動機づけと学習目標の具体化」は今後の教員養成において非常に重要である。そこで、この到達目標(7)の自己評定値に対する他の目標到達度評定の影響を、重回帰分析(ステップワイズ)によって検討した。その結果、影響度(β係数)の高い順に、

目標(2)発達段階と課題の自己評価(.39)、目標(7)教職への動機づけと学習目標についての教師評価(.33)、そして、目標(3)発達的变化と要因の理論的説明に関する自己評価(.18)が説明モデルに探索的に取り入れられた(決定係数.44。つまり44%の説明率)。講義の主目的となる内容の理解を保障することと、教員の説明努力等が肝要と解釈した。

B 自由記述より

(1)他の授業との関連として、学校教育基礎コースの学生は、幼児教育関連の授業との類似点を挙げ、その他の専修コースでは、特別支援教育概論を挙げる者が目立った。教員養成系は、同じ1回生後期に特別支援教育概論が必修であるため、特支関係の内容をどう扱うかが難しい。興味関心を引いた事項では、学習意欲(動機づけ)や、教師の児童(学級)へのかかわりを描いたビデオに関心が集中した。(2)レポート課題に難しさを感じながらも回数や分量的にはちょうどよかったと回答しているが、大部な資料をまとめる作業のたいへんさのつぶやきは聞こえていた。(3)授業時間内での教員と学生とのコミュニケーションはあまり活発でなく、学生同士の意見交換などの機会を求められていた。ただし、修学支援システムのメールなどを活用した情報提供や再上映会のような配慮は好評だった。

※以上の結果を謙虚に受け止め、さらに学生へのフィードバックと授業時のコミュニケーションを改善し、講義の主目的に関する内容の保障について、小テストの工夫などを検討していきたい。

表1 授業シラバスにおける到達目標にもとづく学生の自己評価および教員への評価平均(標準偏差)

到達目標	自己評価	教員への評価	自己・教員評価の相関(すべて5%有意)	自己・教員評価の有意差(5%水準)
(1)生涯発達的に学校教育を捉え、乳幼児期から学ぶ意義を理解できる。	3.31(.56)	3.48(.65)	.55	有
(2)主要な発達段階と発達課題を説明できる。	2.99(.64)	3.52(.66)	.51	有
(3)発達的变化とその要因に関する理論的説明や概念を知る。	3.03(.77)	3.40(.69)	.63	有
(4)教育・保育の実践例を知り、発達や学習を自分なりに説明できる。	3.01(.66)	3.38(.67)	.41	有
(5)授業方法と学習や動機づけの関係について、原則的な知識を得る。	3.31(.65)	3.52(.71)	.60	有
(6)発達や学習に関する先入観の問題を理解し広い視野の必要性に気づく。	3.33(.71)	3.40(.66)	.61	無
(7)教職への動機づけと学習目標を具体化できる(発達・学習支援)。	3.02(.63)	3.23(.66)	.49	有

注: 評定段階は、4 強く思う、3 まあ思う、2 あまりそう思わない、1 全くそう思わない。

「教員への評価」とは、各到達目標について、「それは授業や課題において意図的にとりあげられていた(または、到達できるような配慮を持って教員が指導していた)」という観点から評定を求めたものである。